# 目覚めた春の便り

一字一筆 静岡の今 113

「節分」（2日）が過ぎると気分は春めくが、早春の寒さはまだ厳しい。しかし、周囲を見渡すと、つつましく咲く紅白の花が目に留まる。四季の花々に先駆けて咲き、「春告草（はるつげぐさ）」ともいわれる梅である。各地の梅園や庭先で今年も何げなく開花、人間社会をズタズタにしたコロナ禍も、その清らかな香りと気品あふれる花を汚すことはできなかった。

厳しい寒さの中で、梅はなぜ咲けるのか。その秘密はつぼみの「眠りの深さ」にあるという。梅のつぼみは前年の夏につくられ、半年以上かけて春の開花の準備をする。秋に夜が長くなると休眠に入り、冬の寒さを体験して開花する。しかし、同じ経過をたどる桜などに比べて「越冬芽」の眠りが浅く、目覚めるのが早いのだという。

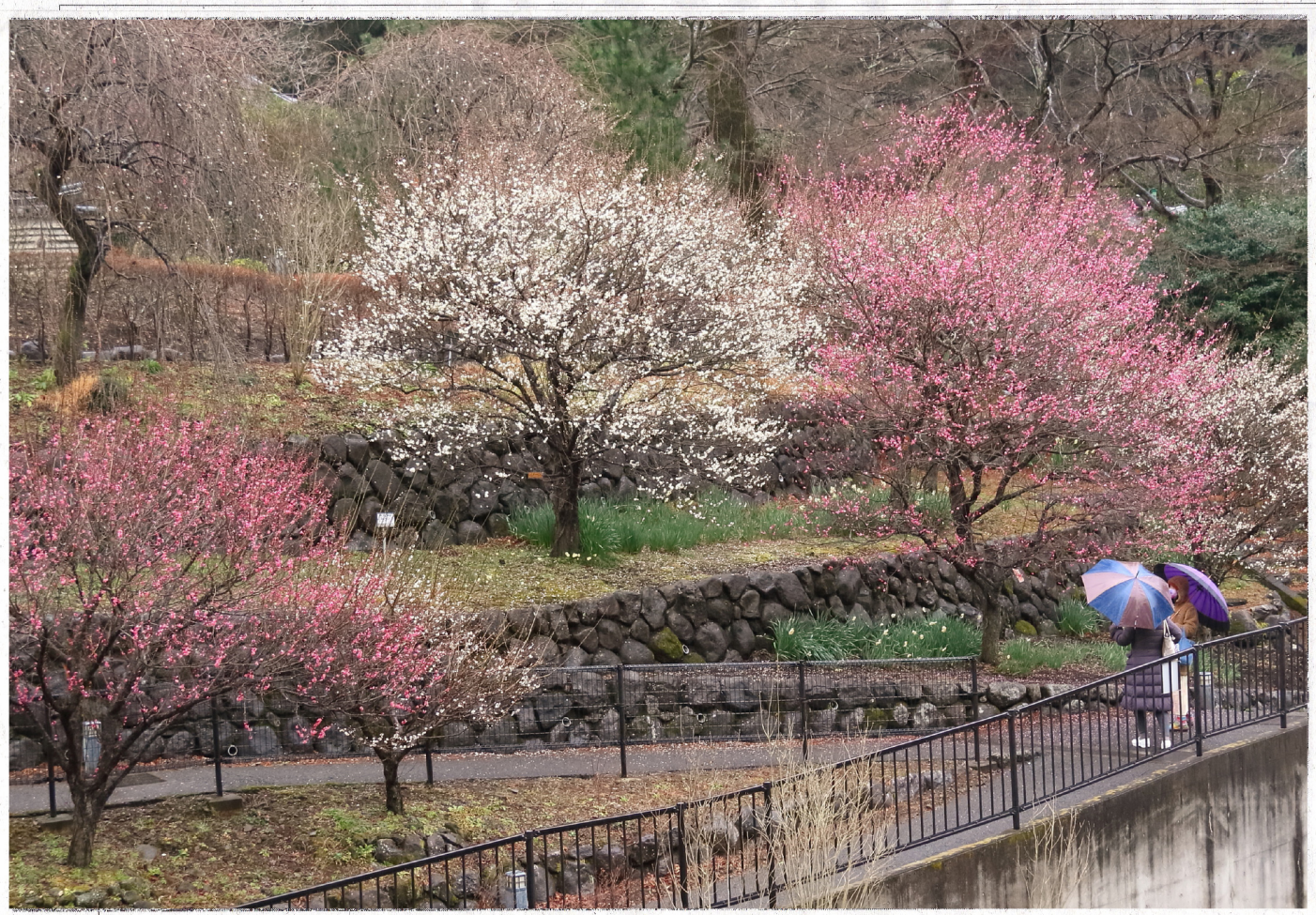
静岡県に春を告げる「熱海梅園」では、今年も1月9日から3月7日まで「第77回梅まつり」が開催されている。コロナの感染拡大防止のため、来園者の健康チェックが厳重に行われ、園内のイベントも中止や縮小を余儀なくされた。それでも園内では60品種約470本の梅が早咲き、中咲き、遅咲きの順で来園者を静かに迎えている。

県中部では洞慶院（静岡市葵区）、蓮華寺池公園（藤枝市）、島田市伊太地区、県西部では「はままつフラワーパーク」（浜松市西区）などの梅園でも楽しめる。コロナ禍の中、ひとり静かに梅の花見も悪くない。

3日は「立春」。暦の上では春になる。今春の「センバツ」に、本県初の21世紀枠で甲子園出場が決まった県立三島南高校には、一足早い春が訪れた。

野球部創立100周年で初の開花は、耐えて咲く梅の香りがする。

（前静岡県監査委員・富永久雄）



紅梅・白梅が咲き競う熱海梅園＝全日写連・樋田進さん撮影